

△地質學第一部及實習	一二	特別研究
△工場建築法	四	學外特別實習
△工業經濟學	四	選擇科目は○又は×印を全部一組として選
△經濟學大要	四	定し外に△印のもの、内二科目を選ぶもの
△鑛山法規	四	とす但し選續專修者は選續學特論を修むべ
特別科目		きものとす

水曜會

水曜會は探鑛冶金學科に於ける教官・卒業生及び學生等の相互懇親を謀り、且つ専門に關する智識を鍊磨する目的を以て明治三十三年の春、學生僅に三名に過ぎぬ時代に創立せられたもので、爾來隔週水曜日の夕、専門雜誌の講讀・研究報告・旅行談を行ふ例會を開催するので、その名稱が由來したのである。現在に於ける會員數は七〇二名に達し、多くの斯界の棟梁を擁してゐることは、吾等の最も意を強ふるところである。明治四十一年三月には研究發表機關として『水曜會誌』を創刊したが、一學科で當時かく創立早々機關雜誌を有するもの、これを全國に求めても多くその類例を見ざるところであつた。この會誌は現在では年四回發行し、鑛業界の一角に異彩を放つてゐる。殊に昭和七年發

行の第七卷は『齋藤大吉先生還曆記念論文集』と題して、門下の執筆に係る論文六十四篇を掲載したもので、これを鑛業關係各方面に頒布した。又大正十四年水曜會創立二十五週年記念に際しては、教官共著の『最新鑛業知識』を編纂して鑛業知識の普及に努めた。又水曜會誌の姉妹誌として大正十二年以來渡邊教授を主筆として『探鑛冶金月報』を發刊し、研究報告の外、時評及び鑛業界の動向を報道し斯界に貢獻し來つたが、これは現在では『探鑛冶金』と改題して、水曜會から離れて山田教授の主筆で續刊せられてゐる。

その他本會は會員互助事業をも行つてゐるが、又教學の本義に鑑み師弟同行の間に於て學生を薰化啓導すべき機關として懇親會・座談會等を開催する等、探鑛冶金學教室に於ては重要な役割を果してゐる。

五 工業化學科

明治三十年六月本學理工科大學の創設せられるや、その内に化學に關する次の四講座が設置せられた。有機化學の講座は第一高等學校長より轉任(明治三十一年七月)せる教授久原躬弦の擔任、理論化學並に無機化學の講座は第一高等學校教授より轉任(明治三十二年九月)せる教授織田顯次郎の擔任するところとなつた。但し織田教授は主として理論化學を講述し、無機化學は東京帝國大學工科大学助

教授より轉任(明治三十一年八月)せる助教吉川龜次郎によつて講述せられた。無機酸及びアルカリ工業並に窯業を主體とする無機製造化學の講座は東京帝國大學工科大学教授より轉任(明治三十年六月)せる初代理工科大学長・教授中澤岩太の擔任するところとなり、染料並に染色工業を主體とする有機製造化學の講座は第三高等學校教授より轉任せる教授吉田彦六郎が擔任したが、同教授は任命後間もなく獨國留學を命ぜられたのでその留學期間中吉川助教の分擔となつた。同助教はその他工業分析並に製造化學實驗を指導した。但し同助教によつて一時講述せられた無機化學は第五高等學校教授より轉任(明治三十二年五月)せる助教近重眞澄の擔當するところとなり、又助教大築千里は製造化學を指導した。

上記の四講座を以て構成された純正化學科並に製造化學科は、明治三十一年九月第一回の學生を入學せしめた。當時の第一回入學生は純正化學科三名、製造化學科僅か一名であつた。而してその授業開始當初の教室としては、第三高等學校に屬する化學關係の教室として、その年構内東側に漸く新築落成せる木造平家教室が使用せられた。この教室は後に工學部中央實驗所となり、昭和八年十二月その一部を残して焼失し、現在はこれに耐火構造の改築並に増築を行ひ、工學部中央實驗所並に工學部事務室として使用せられてゐるが、四十餘年間舊態をそのまゝ存するは、單に北側の一小部分に過

ぎない。かくの如くしてその當時の第三高等學校は、新に造營せる化學教室をそのまゝ、理工科大学に化學教室として占據せられた爲め、別に化學教室新築の完成するまで、一時上記の教室を本學科と共用した。その後約十年間この教室は理工科大学化學教室として使用された。其間元第三高等學校本館であつた構内正面の時計台を備へた赤煉瓦の建物は、主として醫學部醫化學教室として使用せられてゐたが、同教室の新營完成と共に、これに化學教室を移轉し(明治四十一年九月)、その後大正元年十月焼失に到るまでこれを使用してゐた。化學教室は數年ならずしてその新居を失つた結果、一時化學教室分教室としてその一部を使用するのみにて放置してゐた前記木造の舊居に歸り、大正三年九月新築落成に到るまで約二年間これを使用した。

以上は理工科大学化學科創設以來大正三年理工科分離に到るまでの十六年間のことであつて、その間織田教授の逝去(明治三十六年十二月)により東京高等師範學校教授より轉任(明治三十六年十月)せる教授大幸勇吉が物理化學の講座を擔任し、又近重助教は海外留學より歸朝し、新に教授(明治四十一年八月)として無機化學の講座を擔任した。製造化學科に於ては、その後學長中澤教授が新に創設せらる可き京都高等工藝學校長に轉任(明治三十六年三月)の準備として歐米視察の途についたため、東京高等工業學校教授より轉任(明治三十五年四月)せる教授細木松之助が無機製造化學の講座を擔任

することゝなつた。教授は在任八年にして退官(明治四十三年三月)したゝめ、元理工科大學助教授にして退官後一時東京美術學校教授として歐米留學を終へた大築千里が再び教授(明治四十三年三月)として就任、細木教授の後を承け、又吉川助教授は歐米留學より歸朝後、教授に昇任(明治三十八年九月)、電氣化學を主體とする講座を擔任した。續いて歐米留學より歸朝した助教授松井元興は教授に進み(大正元年八月)、分析化學を擔任し、有機化學は久原教授が總長就任(明治四十五年五月)の結果小松助教授の分擔となつたが、久原總長は、翌大正二年五月總長を辭して、再び教授として小松助教授と共に有機化學を分擔することゝなつた。又歐米留學より歸朝の助教授松本均は教授に進み(大正二年九月)、醱酵工業並に石炭瓦斯工業を主體とする製造化學講座を擔任した。かくの如くして純正化學科四講座製造化學科三講座は、それぞれ擔任教授充實して益々發展の機運に向つた。然るに大正三年より理工科大學が理・工の二分科大學に分離せらるゝため、本學科が理學部化學科と工學部工業化學科の二學科に各獨立することゝなり、その準備に忙殺せられてゐる時に、製造化學科に於ては吉田・吉川兩教授の突然の退官(大正二年八月)に遭遇したのであつた。吉田教授は本邦に於て發展の首途にある染料工業に大いに貢獻し、吉川教授は又製造化學科創設當初より學生の指導或は實驗設備の完成に努力し、殊に當時新興の本邦電氣化學界に於て、本邦屈指の權威として各方面に多大なる功績

を擧げてゐたのであつた。續いて大築教授は在任僅かに四年餘にして大正三年七月逝去した。同教授は同年九月獨立す可き工業化學科の準備に多大なる努力を拂ひながらその實現直前に長逝したのであつた。かくして製造化學科は多大なる受難の下に松本教授一人を残して、大正三年八月愈々獨立することゝなつた。

理工科大學分離の結果、同大學化學科の製造化學は、大正三年九月新に工科大学工業化學科として生れ、同時に新築落成せる現在の位置に移轉した。その後時代の變遷並に國情の變化に伴ひ、下記各講座の項に記述せらるゝ如く、急速なる發展を遂げ、昭和十四年四月には工業化學の一部が燃料化學科として新設せられ、昭和十五年四月には同じくその一部が化學機械學科として新設せられた。續いて昭和十六年四月にはその一部は新たに纖維化學科として獨立の豫算が決定せられた。製造化學科創設以來既に四十三年の歴史を有し、その間本邦の工業化學界並に化學工業界に貢獻せるところは頗る大である。既に卒業生も約六百名を數へ、皆戦時下の本邦學界並に業界に活動してゐる。

工業化學第一講座

大正八年一講座増設の豫算が議會を通過し、元大築教授擔任の講座を二分して、寫眞化學及び工業藥品の講座とガラス・セメント・耐火物等所謂珪酸鹽工業と工業窯爐及び固體燃料とを包含する講座との二講座となし、後者を大正九年教授吉岡藤作が擔任し、これを工業化學第一講座と稱した。



吉岡 藤 作

吉岡教授が先づ著手した問題はガラス生成反應中、主としてアルカリ鹽類と珪酸との反應に關するものであつた。大正十二年頃からセメントの研究が始められ、セメントの水加作用に就て、熱天秤によつて、又は染料の吸着を利用する顯微鏡試験によつて、セメントを水と練る時如何なる化學反應が起るかを究明した。その成果は『工業化學雜誌』に發表されてゐる。

陶磁器に關する基礎的研究たる陶磁器坯土の可逆熱膨脹の研究は、大正十四年より文部省自然科學研究奨励金の補助を受けて行はれ、珪酸の轉移による可逆熱膨脹及び水加熱膨脹等の諸問題が詳細に検討された。これ等は『大日本窯業協會雜誌』に十數回に亙つて發表され、現在この方面の重要文獻の一となつてゐる。尙ほ陶磁器に關するものでは中西健治の五金の研究、平岡尙の辰砂軸藥の研究等があげられる。

早くより窯業に於ける熱經濟の重要性を強調してゐた吉岡教授は、能登半島に産する珪藻土を保温材として利用することに着眼し、熱傳導その他の基本的諸性質の研究を行つて、從來餘り顧られなかつた珪藻土より立派な保温材料を製造することに成功した。爾來同地方は、我が邦に於ける保温材料

の生産地として、重きをなしてゐる。昭和四年前後ムーライトの分離定量を端緒として輕量耐火煉瓦の研究が行はれ、この研究は進んで耐火物の一般的諸問題にまで發展し、その結果は一般には發表されてゐないが、我が邦耐火物工業に重要な指針を與へたものである。又昭和七年より半熔融アルミナ、所謂ジンターコロールの研究が始められたが、この研究は教授が昭和九年退官後日立製作所に入社してから會社に於て續けられ、遂に航空發動機用國產發火栓として實を結び、時局に大きな貢獻をしてゐる。それは本年の學術振興會總會に於て述べられたところである。

吉岡教授の退官により、昭和十一年助教澤井郁太郎が教授に進むと共に本講座を擔任した。その後の研究問題はガラスに關するものが多く、主なるものとして高温度に於けるソーダ石灰珪酸ガラスの比重の測定、二相よりなるガラスの研究、無アルカリガラスの研究、ガラス纖維の研究等があり、『工業化學雜誌』等にその結果が報告されてゐる。尙ほガラス纖維の研究は、昭和十五年化學研究所にて中間工場試験を行ふまでに至つた。此等の研究は工業化學教室及び化學研究所澤井研究室で續けられ、學術振興會・旭工業奨励會・谷口工業奨励會等の援助を受けてゐる。尙ほ最近は光學ガラスの基礎的研究をも始めてゐる。

耐火物關係の研究は吉岡教授退官後一時中絶してゐたが、昭和十四年よりアルミナの再結晶に關す

る問題が取り上げられ主として固相反應の立場からその研究が進められてゐる。

燃料に關する研究としては吉岡教授の石炭の風化に關するものを擧げることが出来る。昭和十四年工學部に燃料化學科が創設せらるゝや、從來本講座に所屬してゐた燃焼・工業蒸爐の部門は、この新設の燃料化學第三講座に移管せられることとなり、昭和十五年教授澤井郁太郎がこの講座を擔任、同時に従來の工業化學第一講座を兼擔することとなり今日に及んでゐる。

工業化學第二講座

本講座は、明治三十八年九月、教授吉川龜次郎の歸朝を俟つて、新設せられた。電氣化學及びその應用並びに無機化學工業に關する一部をその主要科目としてゐる。同教授の歸朝に至るまでは小倉教授がその授業を擔當してゐた。大正二年吉川教授の退官後は、九州帝國大學教授中澤良夫を講師に囑託したが、後同講師は本學に轉任、教授に昇進して、本講座擔任となつて今日に及んでゐる。本教室は大正二年焼失したので、大正三年現位置に新築移轉した。その設計設備は中澤教授の指導に係るものである。

吉川教授在任當時は、電氣化學の搖籃時代ともいふべく、これを専攻するものも稀に、且つ又工業的方面に於てもその施設に見るべきものはなかつた。然るに教授は、早くからこれが工業的利用方面



吉川 龜次郎

に大なる將來あることを觀て、専ら電氣分解による苛性曹達の製造の研究、特に水銀法に關する中間實驗に力を注いだ。旅順工科學堂(現旅順工科大学)にその設備を造つたのも、又は大阪曹達株式會社の今日の基礎を築いたのも、皆教授であつた。その他蓄電池製作工業・無機化學製品の製造等の如き、教授に俟つところが多い。教授が本邦化學工業界に寄與したこと實に鮮少でなかつた。

電氣化學工業の大工業としての今日の隆盛も、大正初期にその基礎は培はれたのであるが、その依つて來るところは本大學の研究にあるといふべく、それは決して誇張の言ではない。

その他無機化學方面に於ける本講座の業績としては、無機酸アルカリの製造工業を主體として、無水硫酸製造に用ふるゾアナジウム燐媒の研究を完全し、その實際的應用を見るまでに至つたことを擧げなければならない。

亦稀金屬の精鍊に關する研究、就中金屬タングステン・金屬タンタラムの精鍊、更に電氣化學方面に於ては蓄電池及び乾電池、並に空氣電池の製造に關する研究、その他電氣化學測定に關する研究等



中澤 良夫

も挙げられなければならない。

工業化學第三講座

本講座擔任教官の變遷を記せば次の如くである。

自明治三十一年八月	至大正二年八月	教授	吉田彦六郎
自大正二年九月	至大正七年五月	助教授	福島郁三
自大正七年六月	至昭和八年五月	教授	福島郁三
自昭和八年六月	至昭和十一年六月	教授	喜多源逸
自昭和十一年七月	至昭和十四年三月	助教授	喜多源逸
自昭和十四年四月	至昭和十五年七月	助教授	小田良平
自昭和十五年八月	至現 在	教授	小田良平

因みに吉田教授兼任當時は理工科大學時代で、本學科も製造化學科と稱せられてゐた。理工大學が二分科大學に分離せられて以後は、工學部工業化學教室と改稱され、その時から本講座は有機工業化學第一部と稱せられた。講座としては古い歴史を有するもの、一つである。

吉田教授は退官後昭和四年三月東京に於て逝去したが、在職中種々の研究に従事し、多大の業績を本學に残した。その主なる研究成果を挙げると次の如きである。

漆に關する研究。樟腦油に關する研究。油脂類に關する研究。

吉田教授の後任として福島教授が本講座を擔任した。同教授は染料化學・纖維化學及び製紙化學に造詣深く、その數多い研究の發表は學界に重きをなしてゐる。後輩の指導には殊に熱心で、特にその崇高なる人格は後輩の今猶景仰するところである。教授の功績は學界ばかりではなかつた。更に實際



福島 郁三

工業界に遺した足蹟も大きい。例へば當時本邦に於て非常な勢で興隆して來た人絹工業の確立に努力せるが如きその一例である。教授はしかし不幸にして昭和四年四月より同年十月の間に互る歐米視察より歸朝後間もなく病を得た。その後病狀依然たるため、遂に教室員一同の愛惜の中に昭和八年五月退官した。教授が在職

中研究せる事項は枚擧に遑がないが、グイスコス絹絲に關する研究、染料並に染料中間物の光化學及び分光學的研究、絹フィブロインに對する銅アルカリ液の作用に關する研究等は就中著名なるものである。

尙ほ教授はその後病全く癒え、京都に自適せることを附記して置きたい。

福島教授病氣退官後喜多教授本講座を分擔し、本講座の將來の擔當者の育成と當時諸外國に比して著しく遜色のあつた我が邦の有機合成化學の進歩を促す爲めとから、ブラーグ（當時チエツコスロバキヤ國）大學の講師カール・ラウエルを本講座の講師として招聘した。カール・ラウエルは昭和九年八月來朝、同九月より染料化學の講義を行ふ傍ら、助手小田良平を始め多くの協同研究者等と共に研究に盡瘁し、本學のために多大の業績を残して、昭和十一年五月ドイツに歸つた。カール・ラウエルが在職約三年間に發表せる研究論文を記せば次の如くである。

○化學構造と反應性との關係 第十報—第十八報 ジャナル・ヒュア・ブラクタイシエ・ヒエミー掲載
○ベンザンスロンの硝化 ドイツ化學會誌掲載

○反應速度に對する溶劑の影響 第一報—第十二報 ドイツ化學會誌掲載

カール・ラウエル歸獨後小田良平教授に任せられ、本講座を擔任し、傍ら大阪帝國大學教授小竹無二雄を講師に招聘し研究上の助力と指導とを得て今日に至つてゐる。小田教授はカール・ラウエルの後を繼ぎ、染料化學に關する研究の外、最近の合成化學上重要な合成樹脂・合成ゴム、並びに合成纖維に關する研究を行つてゐる。尙ほ染料化學の研究には現燃料化學科助教授新宮春男が一時従事し



小田良平

てゐた。又合成ゴムに關しては助教授古川淳二これに當り、その研究は大いに進んで、本大學化學研究所に於て相當大規模に目下研究が續けられてゐる。小田教授が本講座を擔任して以來の研究事項及び今日行ひつゝある研究事項を擧げると次のやうである。

染料合成基礎反應の研究。アンストラセンに對する硝酸の作用。

ナイロン並に其類似化合物の合成。高級合成樹脂の製造。

工業化學第四及第五講座

工業化學第四講座はもと理工科大學化學科に屬し、醱酵工業並びに石炭瓦斯工業を主體とし、教授松本均の擔任するところであつた。その後理工兩大學に分立すると共に本講座は工科大學に屬し、そ



松本均

れと共にその名稱は現在の如く改められ引き續き松本教授がこれを擔任した。同教授は昭和八年四月停年退官、在任中斯學に幾多の業績を残したが、その内主要なるものとしては、我が邦特有の日本酒と麥酒釀造工業とに關する研究、更に本學構内東北部に建設せられてゐる本學用瓦斯發生設備の設計、並びに大阪市の塵埃

處理工場の設計等を擧げることが出来る。教授は明治三十六年既に化學科の研究生として工業化學の研究に挺身し、爾來三十年間、その間學界並びに工業界への貢獻はこゝに特に贅言を要しない。教授退官後は、昭和十年以來教授櫻田一郎の擔任するところとなり、現在に及んでゐる。

工業化學第五講座は、大正七年六月新設せられ、教授喜多源逸これを擔任、油脂・石油並びに纖維工業に關する事項をその研究主體としてゐる。同教授の業績は、燃料化學科の項に述べられてゐるもの外、次に記すが如くである。

纖維素並に纖維に關する研究 纖維素並に纖維に關する研究は、本講座に於て、大正十年頃から喜多教授及び第三講座擔任福島教授の指導の下に系統的に開始せられた。當時勃興の氣運にあつた本邦の人造纖維工業の指導並に同工業に對する高級技術者の育成も亦その目的とするところであつた。

大正十二年喜多教授及び共同研究者に依り「醋酸纖維素製造試験」と題する論文が發表され、その後引續き今日に至るまで、醋酸纖維素に關する研究は各方面へ進展せしめられてゐる。

ヴィスコス法人造纖維に關する研究は、大正十三年喜多教授・富久力松等連名で最初の報告が發表せられ、その後今日に至るまで教授指導の下に第九十報まで發表せられてゐる。また福島教授のヴィスコスに關する最初の研究結果は大正十四年に發表せられた。大正十三年頃には世界に於ても

この方面の研究は未だ少く、本講座の研究はヴィスコスの化學の確立に資するところ多く、例へば熟成中に於ける纖維素分子の重合度變化に關する研究の如きは十數年後に於て各方面よりの支持を受け、斯學に有力な基礎を與へてゐる。

大正十三年頃から喜多教授指導の下に竹その他の纖維素資源の化學的研究が開始され、昭和十年頃までに若干の業績が發表された。其間に纖維素を主體とする人造纖維工業が勃興し、次第にその隆盛を見るに至るや、當時本邦に於ける纖維素原料問題に關する研究が不十分なるに鑑み、この方面にもその研究を擴充して、昭和十年以降樺太・北海道・朝鮮のバルブ材に關する基礎的並びにその利用方面の研究を始めた。その他内地・滿洲及南洋の未開發纖維素資源の研究等を系統的に行ひ、その結果は堀尾助教その他の名によつて今日までに多數發表されてゐる。一方稻葉及び桑條が、特に我が邦に於ては、纖維素資源として甚だ重要であるのに鑑み、其等に關する經濟調査及び科學的工業的研究を行つたが、その後纖維素資源確保の重要性に關聯し、其等の研究は一層強化されて、今日に及んでゐる。

纖維素誘導體に關する研究は、高級脂肪酸・ナフテン酸・バラトルエンサルホン酸等のエステル、アリル、ベンデル、グリコール酸等のエーテルに關し、大正十四年頃より喜多教授指導の下に櫻田・

中島等によつて行はれた。是等の研究は獨・英その他の纖維素化學に關する多くの著書に引照せられ、斯界に重きをなしてゐる。

纖維素纖維の化學反應機構に關する研究 纖維素溶液の粘度的研究等も櫻田教授及びその共同研究者によつて昭和六年以來行はれ、この方面の研究に資するところ大である。又纖維に關するX線圖的研究も昭和六年頃より主として櫻田教授・淵野講師によつて行はれたが、就中結晶水を有する纖維素即ち「水纖維素」並に纖維素の新變態「纖維素IV」の發見があつたことはこゝに特筆せらるべきである。本講座に於ける纖維素化學の研究が世界的にも重きをなしてゐることは、喜多・櫻田兩教授が、獨逸に於て發行せられてゐる、この方面の専門雜誌「ツェルローゼ・ヘミー」の編輯者に席を連ねてゐることからも知られ得るであらう。

本講座に於ける纖維に關する研究は、化學研究所喜多研究室と密接な連繫の下に行はれてゐるが、堀尾・隅田兩助教授による「高溫二浴緊張固定法」による高強力人造纖維及び羊毛様捲縮を有する人造纖維の製造、或は李助教授の合成纖維「合成一號」の發明等の如きも、皆その基礎は本講座に於ける研究に得られたものである。

纖維素のみでなく蛋白質その他の人造纖維に關する研究や、諸種の天然及人造纖維の彈性的性質に關する研究等も本講座に於て行はれてゐる。典型的な天然高分子體なる纖維素に關する研究に於て十數年の歴史を有する本講座は、更に數年前より合成高分子體に關する系統的な研究を開始し、文部省科學研究費・昭和奉公會等より援助を受け、重合反應・重合物・溶液等に關し物理化學的研究を各部分に進めてゐる。纖維素並びに纖維に關する研究業績は略々上述の如くである。

油脂に關する研究 油脂に關する研究も専ら喜多教授の主宰するところ、最初に取り擧げられた問題は油脂の加水分解に關する研究であつた。同教授は蓖麻子リパーゼの油脂分解作用及性狀を研究し、その工業的應用を考案し、その報告は大正七年及十二年に發表せられた。引續いてツウキツツエル分解劑の製法・成分及び應用が研究され、同時に本邦に於て初めてこの工業的試験が實施せられた。また是等の研究と同時に大正十二年以來、過熱水蒸氣による油脂・蠟類の加水分解法及び高級アルコールの工業的製法も考案せられた。加水分解に關する研究の一段落と共に更に馬詰講師等と共力して硬化油に關する研究に着手し、その第一報は大正十二年以後に引き續いて十三・十四年の間に互り陸續としてその研究は發表せられた。

以上の研究以後油脂のウムエステルング及びアルコールシスの研究(昭和七年及八年)、油脂のアムモノリシスの研究(昭和九年)、油脂重合の研究(昭和五年—十四年)、高分子ケトンの合成研究(昭和

十二年—十三年)等が行はれた。是等の研究には小田良平・木村和三郎・紀喜一郎その他が参加した。

本學科専攻の卒業生は専ら纖維化學工業界に活躍してゐるが、更に當教室には毎年諸方の纖維工業會社から數人の技術者の派遣を見、直接これが育成に當つてゐる。纖維化學界に於ける當教室多年の功績は纖維化學科創設の氣運を醸成し、遂に昭和十五年、非常時下にも拘らず、その創立が決定せられ、その豫算は十六年度に計上せられた。既に同科第一學年學生(定員十五名)の募集を終り、新しく二講座を設置して工業化學第四講座を移管し、三講座を以て纖維化學科を設立することとなり、目下官制の公布を待つてゐる。

工業化學第六講座



宮田道雄

本講座は大正八年六月創設、助教授宮田道雄擔任、後も同助教授は教授に任せられ、今日に及んでゐる。

溯つて本講座の起源を求むれば、理工科大學の無機製造化學講座に至らなければならぬ。

同講座は教授細木松之助の擔任するところであつたが、同教授

は明治四十三年三月退官、後任教授として東京美術學校教授大築千里が就任、同教授は本講座が元來黨業に關する工業化學を主體としてゐたのに、更にこれにその専攻とする寫眞化學を加へたが、これが今日の工業化學第六講座創立の端をなしたのであつた。

當時我が邦に於ては寫眞に關する學術的研究は殆んど皆無といふに近く、大築教授がその唯一の權威であつたといふも強ち過論ではなかつた。工業界に於ても亦當時見るべき施設はなく、たゞ纔かに神奈川県平塚に日本乾板株式會社と稱する小工場が英國ネルソン會社の技術並びに全設備を輸入して經營せる位であつて、これも大築教授の指導に係るところが多かつたといふ。



大築千里

同教授は在任僅か四年餘にして逝去したが、其間寫眞化學の研究には幾多の業績を残してゐる。例へば一液現像定着液に關する研究報告の如きは、獨塊寫眞化學年報にその記録を止め、又著書としては『寫眞全書第一卷乾板陰畫編』の如きが遺されてゐる。

今日我が邦に於て寫眞化學工業が著しく發達して、普通の寫眞用感光材料に就ては既に歐米依存の域を脱せるが如きは、最も多く同教授先鞭の功績に歸せらるべきものである。教授は本學理工科大學

の分離に關する諸準備、殊に新たに開設せらるべき工科大学工業化學科の學科目の配置・教室新築の設計・その設備並びに教官等のことに就て一人でその處理に當つた。現在の工業化學教室本館は實に教授苦心の結晶といふべきである。

大正三年七月理工科大学分離の結果、無機製造化學講座は工科大学工業化學第一講座となり、後ちその黨業に關する部分は助教吉田藤作、その寫眞化學に關する部分は教授中澤良夫の分擔するところとなつた。尋で大正八年この講座は黨業に關する部分と寫眞化學に關する部分とに分離せられ、前者は工業化學第一講座として教授吉田藤作これを擔任、後者はこれに工業用藥品を加へて工業化學第六講座として獨立、大築教授の教を受けた助教宮田道雄がこれを擔任し、講師矢野哲夫がその實驗の一部を擔當して、こゝに新たななる發足を見るに至つたのであつた。爾來本講座に於ける研究は主として寫眞化學工業に關する基礎的並びに工業的研究を主眼としてゐるのである。その業績の主なるものは、寫眞用臭化銀乳劑の製造に關する研究、臭化銀乳劑の感光性に關する研究、臭化銀乳劑の生成に關する研究、寫眞印畫紙に關する研究、寫眞用ゼラチンに關する研究等である。

六 建築學科

大正八年工學部に建築學科の新設が決定せらるゝや、同年五月工學部教授日比忠彦・名古屋高等工業學校長武田五一の兩名は、建築學科創設委員を囑託せられ、翌九年八月第一・第二・第三講座が設立されるに至つた。日比教授は建築學第一講座を擔任して建築構造學を講じ、同月天沼俊一助教に任せられて建築歴史(第三講座)を擔當し、九月武田五一教授に任せられて第二講座を擔任し、こゝに陣容略々整備したが、尋で同十年四月第四講座が設けられ、こゝに建築學科は一應完成のこととなり、今日に及んでゐる。

現在における職員の定員は、教授四名、助教三名、助手五名である。是等職員及び卒業生を中心として、建築學研究會を組織し、昭和二年五月以來、雑誌「建築學研究」を發行してゐる。

建築學第一講座

本講座は、大正九年八月創設せられたものであるが、それより以前、明治三十九年理工科大学土木工學科に建築學講座が設けられたのに端を發してゐる。建築學科設立以來に於ける擔任者及び分擔者の移動中、主なるものは次の如くである。

大正九年八月

命 擔任

教授 日比忠彦

十年六月

日比教授逝去

昭和十三年 九月

五六〇

命 分擔 助教授 横山 尊 雄



藤井 厚 二

藤井教授はその助教授のとき『住宅に就いて』と題する小冊子を出版し、住宅改善の必要を主張して世人の注意を喚起したことがあり、その後自宅を前後四回にわたつて新築し、これに親しく住んで実験研究を重ね、その結果をまとめて「我國住宅の改善に關する研究」を發表した。この論文は日本住宅の科學的綜合研究を始めて行つたものとして劃期的といふべく、從來殆んど顧みられなかつた住宅設備の研究に於て新分野を開き、また氣候との關聯のもとに住宅研究をすることの重要性を明かにした。この論文は爾後の考察をも加へて『日本の住宅』(昭和三年)と題する著書となつた。

藤井教授は第五回目の自宅「藤竹居」を建て、設備方面のみでなく意匠方面についても主張を明かにし、『藤竹居圖案集』(昭和四年)によつて詳細なる圖を公表したが、後にさらに『續藤竹居圖案集』(昭和七年)を出版して、我が邦の木造住宅に對する規範を示した。また一方では『鐵筋混凝土の住宅』(昭和五年)によつて、我が邦に適する鐵筋コンクリート造住宅の意匠及び設備を發表した。『床の間』(昭和九年)はその設計になる床の間を集成した圖集であるが、教授の主張をよく物語つてゐる。藤井教授と助教授

横山尊雄との協力になる「日本人に對する建築諸設備の寸法的研究」は、昭和十年より發表をはじめ、藤井教授逝去後は横山助教授の獨力にて研究をつづけ、昭和十三年末に至り一應完成を見た。

助教授伊東恒治は早くより窓の採光及び換氣について研究し、天空輝度と地上に於ける晝光照度との實測を行ひ、晝光照明計算についての簡易な新圖表を發表した。それらの研究成果は「窓の研究・採光篇」として近く出版の豫定である。

七 燃料化學科

本學科は昭和十三年五月その創設委員の任命あり、翌十四年三月始めて開設せられたものである。燃料は吾々の日常生活に缺くべからざるものであるのみでなく、吾々の利用し得る最も重要なエネルギーの源泉として、産業革命以後大工業勃興の基本をなしたものである。然るに我が邦に於ては比較的燃料資源に恵まれず、これが合理的の使用に關する研究は最重要な事柄であるべきにも拘らず、この學科が近年迄獨立の一科として認められなかつたといふことは、寧ろ不可思議ともいふべきであらう。しかし本學に於ては燃料化學科創設前と雖も、燃料に關する事項が決して輕視されてゐた譯ではなかつた。燃料化學のみを専門とする講座こそ設けられてゐなかつたが、これに關する學術上の研究及び

授業は工業化學科のそれぞれ關係深き講座に於て行はれてゐたのであつた。即ち工業化學第一講座・工業化學第五講座・工業化學第四講座の内にそれぞれ固体燃料・液體燃料・瓦斯體燃料に關する事項が含まれてゐたのであつた。

この時代工業化學教室に於て行はれた主なる研究業績を挙げると次のやうである。何れも第五講座



喜多源逸

擔任教授喜多源逸指導の下に行はれたのであるが、大正十四年より昭和四年に互つては石油の熱化學的研究、大正十四年には石炭酸及びαナフトールの水素添加、大正十五年には石油のオゾン酸化、低溫長時間加熱による石油の變化、フォルモリット反應、アセチレンの焦性重合等に關し研究が行はれた。殊にアセチレンの

焦性重合の研究に於いては水蒸氣炭酸瓦斯等により反應温度の上昇を防ぐことが始めて行はれたのであつて、注目すべき研究である。更に昭和五年には三池炭の溶劑抽出に關する研究、亞炭の分析及びフミン酸の性質、又亞炭フミン酸リグニン及び纖維素の低溫乾燥に關する研究が行はれた。昭和六年には液狀パラフィン、ベンゾール、トルオール及びキシロール並びに高度不飽和炭化水素の高壓下又は水素加壓下に於ける熱分解に關する研究が行はれた。昭和九年には膠質燃料の安定劑に關する研究、

メタンの熱分解による液狀油生成に關する研究が行はれた。喜多教授の下に於て實際に此等の研究に當つたのは馬詰哲郎・阿部良之助・小田良平等である。

喜多教授の指導の下に行はれた燃料に關する研究の内最も重要なものは、兒玉信次郎・藤村建次・常岡俊三・村田義夫等によつて行はれた合成石油に關するものである。この研究はフイツシャーが始めて一酸化炭素と水素とより常壓で石油を合成し得ると云ふことを發表した翌年、即ち昭和二年から今日迄繼續して行はれてゐるものであつて、發表された論文も五十編を越え幾多の新しい發見がなされ、世の注目を惹いてゐる。この研究は應て政府の認めるところとなり本學に燃料化學科が設けられる端をなしたのであつた。この研究は主として合成石油製造に用ひる優秀な觸媒の製造法を確立することを目的として行はれたものであつて、コバルト觸媒・ニッケル觸媒・鐵觸媒・合金觸媒等各方面に互つて行はれたものであるが、何れの方面に於てもフイツシャーの研究室と相前後して最高の石油收量を與へる觸媒の製造法が發見された。その二三の著しい業績を挙げると、コバルトにトリヤ・マグネシヤを添加すると非常に良好な結果を與へることが發見され、これが今日に於ても工業的に應用されてゐる。又鐵を主成分とする觸媒は従來内外に於ける多數の學者の研究にも拘らず満足すべき石油收量を與へるものが得られなかつたが、この研究に於て始めてコバルト觸媒に匹敵するものが造られる

やうになつた。コバルトは高價であるのみならず世界的にも産出の少いものであり、我が邦には産出を見ない金屬であるので、この成果は我が邦合成石油工業の發達に重要な意義を齎すものである。歐洲の各國に於ては、第一次歐洲大戰の經驗により液體燃料の供給を確保する必要を痛感し、その解決に腐心してゐた。我が邦に於ても燃料の問題は多年識者の憂へるところであつたが漸く七八年前に朝野の問題となり、政府に於ても昭和十一年に始めて人造石油七ヶ年計畫を確立し燃料化學に關する研究並びに研究者技術者の養成を行ふべき機關設置の必要を認めるに至つた。政府は本學に於ける從來の燃料研究に關する業績に鑑みて、昭和十三年本學に燃料化學科を開設するに決し、遂にこれに關する豫算が承認されたのであつた。その當時決定された要項は、昭和十三年度に於て燃料化學開設に關する準備をなし、昭和十四年度より學生を入学せしむること、燃料化學科に燃料化學四講座を置くこと



兒玉 信次 郎

等であつた。これに基いて昭和十四年には燃料化學二講座が開設され、同時に始めて學生二十名を入学せしめ、昭和十五年には同第三講座が開設され、更に昭和十六年には同第四講座が開設される豫定である。第一講座は當初より教授喜多源逸が擔任し、第二講座は當初教授澤井郁太郎が兼擔任してゐたが、昭和十五年よりは



澤井 郁太 郎

教授兒玉信次郎が擔任し、第三講座は初めより教授澤井郁太郎が擔任して今日に至つてゐる。現在我が邦が當面してゐる燃料化學の最も重要な問題は、東亞に於ける燃料資源の開發、人造液體燃料工業の確立による液體燃料の自給、高性能の液體燃料の製造、工業用原料としての燃料資源利用法の研究等であるが、燃料化學科

に於ける研究題目及び學生の教育も亦此等の問題の解決のために最も適切ならんことを期してゐる。即ち第一講座に於ては燃料化學一般及び石油精製及び性能に關する事項、第二講座は人造石油・燭煤化學・高壓化學に關する事項、第三講座は燃燒・工業窯爐・耐火材料等高温工業に關する事項、第四講座は乾溜工業・高壓装置その他燃料工業に用ひられる機械に關する事項を内容とするものである。燃料化學科開設以來今日まで引續き各方面に互り研究を行つてゐるがその内重要なものを挙げるに次のやうである。いふまでもなく最も重要なものは合成石油に關する研究であつて、引續き鐵燭煤の研究を續行し、工業上貴重な幾多の事實を發見した。これに關聯して石油合成反應の機構を明かにする爲めに、活性化吸着の測定による燭煤の研究、X線による燭煤の研究を行ひ、多くの知見を得つゝある。更に合成石油の成分に關する研究及び合成石油より高セタン價ディーゼル油の製造に關しても研

究を進めてゐる。石油合成法の一應用として一酸化炭素と水素より不飽和瓦斯狀炭化水素のみを合成し得る條件を探究する實驗も行つてゐる。加壓下に於ける一酸化炭素と水素の研究に關する實驗も行つてゐるが、好收量を以つてインブタノールを合成し得る觸媒を發見した。又五—二十氣壓に於ける鐵觸媒を用ひる石油合成法の研究に關しても最近極めて耐久性の大きい觸媒を發見した。

その外に炭化水素の分解・重合・異性化等炭化水素の變換反應の機構を明かにし、それを基礎として、高性能の液體燃料を製造する方法を確立する爲めに一連の研究を行つてゐる。この爲めには先づ炭化水素の分折法を確立する必要がある譯であるが、現在インブタン及び揮發油の分析法に關する研究を完了し、更にインパラフィンに對する五鹽化アンチモンの作用に關する研究をも終了した。不飽和炭化水素の重合に關する研究としては、インブタンの重合及び他の不飽和炭化水素との共重合に關する研究は、相當の進捗を示してゐる。その他炭化水素の接觸分解に關する研究も行つてゐるが、更に炭化水素の熱分解に關する基礎的研究に着手せんとしてゐる。

八 化學機械學科

化學機械學は化學工業に於ける化學反應を行ふ可き工業的單位操作を基礎として、これに關聯した

機械裝置並に製造工程に關する理論及び應用を研究する工學の一新分科である。從來の化學工業發達の跡を觀るに如何に實驗室的に研究が完成されてもこれを能率よく工業化し得る機械裝置が製作されなければ到底工業にはなり得なかつた。而も昔時の化學工業は製品の種類は少く、その生産額も僅少であつたので、製造裝置としても極めて小規模のもので足り、化學機械の重要性を感ずることが比較的少なかつたのであるが、現代の化學工業はその規模實に巨大にして、技術亦極度に高度化されたので、化學機械裝置の特別なる重要性が強く認識されるに到つた。元來この方面の學問は我が邦に於ては工業化學科の中に包含されてゐたのであるが、化學工業の飛躍的發展に伴ひ、化學機械に關する獨立の講座を設置する必要が痛感され、文部當局も亦これを認め、遂に大正十一年我が邦に於て最初の化學機械學講座が工業化學科に新設されるに至つたのであつた。本講座を擔當せしむべき候補者として大正九年工業化學科を卒業し、當時大日本セルロイド會社に勤務中の龜井三郎を講師として招聘した。同講師は大正十二年助教に任命され、昭和二年在外研究員として化學機械學研究の爲め、滿二ヶ年間獨逸・瑞典及び米國に在留、昭和四年歸朝と共に化學機械學講座を擔任、同五年教授に任せられた。化學機械學講座が設置され龜井教授がこれを擔任するまでの期間は工業化學科の諸教授が分擔した。即ち教官名と分擔した單位操作の種類は次の如くである。蒸發及乾燥裝置(松本教授)、運搬裝



井 三 郎

置(中澤教授)、濾過及壓搾装置(喜多教授)、分溜及凝縮装置(福島教授)、粉碎及混合装置(吉岡教授)、冷却及加温装置(仲井助教授)、壓縮瓦斯(大森助教授)。

爾來化學機械學講座に於ては専ら化學機械装置の學理並に應用に關する指導並に研究に従事して來たのであるが、化學機械装置は化學工業の全部門に於ける製造装置を包含し、その分野は極めて廣汎であり、而も日進月歩の状態にあるを以て、現在の如く一教授によつてその全般の蘊奥を究むることは到底至難の業である。こゝに於て工業化學科としては時代の進展に鑑み、化學機械學第二講座を増設することによつてかゝる不便を幾分なりとも緩和せんと考へ、昭和十四年度の新規豫算中にその要求を提出したのであつたが、不幸文部當局に認められなかつた。

然るに支那事變も愈々長期建設の新段階に入り、日滿支更に大東亞を一體とする新資源の開発並に經濟的建設を確立すべき大目標の下に、本邦化學工業が大陸に進出し、その國策的使命遂行の急先鋒たるべき時機が到來し、この使命達成の爲に化學機械に關する技術者の養成が極めて必要になつて來た。偶々發生せる歐洲戰爭により國際關係は極度に惡化し、歐米諸國より機械類の輸入杜絶せる結果、

從來の如く我が邦の化學工業は製造装置の設計製作建設全體としての輸入など絶對不可能となり、好むと好まざるとを問はず、その自給自足を餘儀なくされたのである。かくの如き急迫せる四圍の情勢は、化學機械學の一大擴張を要請したので、工業化學教室としても前年提出した化學機械學第二講座増設案を更に擴大し、獨立した化學機械學科創設案を、昭和十五年度豫算として提出した。然るに文部及び大藏當局に於ても、現事務局に於ける本學科の必要性に關する各方面の輿論に聞き、その重要性を認めた結果、同豫算案は遂に通過した。斯くして昭和十五年度より化學機械學科の創設が確定し、舊高工跡に六百餘坪の新教室が新築されることになり目下工事中である。

化學機械學科は四講座よりなり、その中一講座は現在の工業化學科の化學機械學講座が移管されるので、新設は三講座である。同學科は毎年一講座宛新設され三ヶ年で完成される豫定である。従つて昭和十五年は二講座となり、第一講座は教授龜井三郎、第二講座は



岡 田 辰 三

教授岡田辰三が擔任した。講座内容は、第一講座に化學機械設計及び單位操作第一部、第二講座に化學機械材料及び單位操作第二部、第三講座に化學工業量論・化學熱力學及び反應操作、第四講座に工業熱學・流體力學及び輸送機・固體輸送及び貯藏等が配當

されてゐる。即ち第一及び第二講座は、化學機械學特有の裝置學的の講義を行ひ、第三講座は工業物理學的內容を有し、化學反應とこれを遂行する裝置との關聯を教へ、第四講座は裝置設計上の基礎的問題である工業傳熱及び流體力學を教授する。以上の他各講座に實驗・製圖及び演習が課せられてゐる。講座外授業として、工業化學・燃料化學・機械工學・冶金學及び工學部共通科目の講義がある。

學生の教育方針としては、第一學年に於て工業化學・燃料化學・材料力學・物理化學及び數學解剖等の基礎的知識を與へ、第二學年に於て化學機械學に關する各般の素養を授け、第三學年に於て化學機械設計及び演習を行ひ、これでその全課程を終る。尙ほ選擇科目は多くして學生をして目的に應じ廣く選擇の自由を與へてゐる。化學機械學科の卒業生は、化學工業會社に於ては化學機械裝置の合理的操作・能率の向上及びその設計の衝に當り、化學機械會社に於ては化學機械の設計及び製作の責任を負ふべきものである。即ち研究結果の工業化を計り、それを遂行するに必要な機械裝置の設計製作を完成することが、國家として最も緊要である。従つて本學科に於ては、この目的に應じ得る技術者の養成を目標に、その教育方針を建て、ゐるのである。

化學機械學科に於ける研究としては、同學科の創設前化學機械學講座として工業化學科に附屬してゐた間は、専ら擔任龜井教授を中心として行はれたものであつて、その最も力を集中したのは乾燥の

研究である。就中固體乾燥の機構に關しては、昭和四年以來現在まで研究を繼續し、後ち原保・水野成二・鹽見四郎等と共に本邦産各種材料に就いて研究を行ひ、固體乾燥の機構を明にし、固體材料に於ける乾燥による水分擴散式を誘導し、これを實驗的に證明し、水分擴散係數を求めた。乾燥經過中に於ける固體材料中の水分分布の研究により、恒率乾燥より減率乾燥に移る際の機構を明にし、併せて限界水分の存在を確認した。本研究は三十餘篇の研究報告として發表され乾燥技術の改善に資するところ大である。次に昭和十一年より西田佐一と共に透析器に關する研究を行つた。透析器による品質と膠質との分離は糖蜜の精製等に古くから實施されてゐたが、近年に到つて人造絹糸工業に於ける苛性曹達廢液の回收に大々的に應用されるに到つたものであるが、本研究によつて苛性曹達廢液の透析を行ふ場合、透析隔膜に直接的に作用してゐる歴は靜水力學的歴のみであつて、滲透歴は考慮する必要のないことを確め、工業上問題となつてゐた疑點を解決した。昭和七年メートル單位の溫度圖表を作成し、これを本邦及び獨逸の専門雜誌に發表した。昭和十三年より專賣局の依頼により、鈴木宗一郎と共に、煙草の乾燥並に濕害の研究を行ひ、煙草製造技術上改善すべき諸點を發見した。昭和七年より陶磁器試験所の依頼により、石塚信太郎と共に、鋸屑燃焼法の研究を行ひ、鋸屑の乾燥及び燃焼爐を考案し、昭和十一年より同試験所及び民間工場に於て工業的に實施した。昭和十一年より池田

八束と共に湿度計檢定裝置の研究を行った。從來湿度計の正確なる檢定裝置がなかつたのであるが、本研究により迅速に而も正確に實施し得る檢定裝置を考案し、これを島津製作所にて試作した。昭和十二年より巽正と共に噴霧乾燥の研究を行った。液狀原料を微細な粒子に分散し、極めて急速に乾燥粉末を得る方法である。本研究によつて乾燥圓筒内に於ける溫度分布、空洞粒子の成因等を確めたが、尙ほ研究繼續中である。昭和十四年文部省の科學研究費により高壓に於ける瓦斯の溶解度に關する研究に着手し目下研究中である。本研究は將來更に高壓に於ける各種の問題、例へば高壓による瓦斯の液化分離、高壓に於ける物質の特性及び高壓反應裝置に於ける金屬材料の劣化の機構等に研究を進める豫定である。

以上は昭和十五年化學機械學科の創設に到る迄に工業化學科化學機械學講座に於て行はれた主なる研究業績である。新學科設立と共に研究陣は飛躍的に擴大された。即ち龜井教授・岡田教授及び今後任命される第三及び第四講座擔任の教授を中心とし、その指導の下に化學機械學の各部門に互り研究が行はれることとなつた。

九 工學部中央實驗所

中央實驗所は大正三年に計畫された。工科大学が理工科大学から獨立した年である。最初機械工學科の教授松村鶴藏と土木工學科の教授日比忠彦とがその専門の立場から、材料試験の完全な設備が必要であるといふ主張を以て、土木・機械の共同で材料試験室の新設を希望してゐた。他の各學科でも獨立した工科大学として發展するためには規模の稍大なる實驗設備を以て工科大学としての綜合研究を行はねば外國との頡頏は困難だとの意見が強く、遂に時の總長澤柳政太郎を動かして中央實驗所設立の計畫を進めることになり、左の創立委員が任命された。

委員長	機械工學科	松村鶴藏
	土木工學科	日比忠彦
	電氣工學科	本野亨
	工業化學科	中澤良夫
	探鑛冶金學科	渡邊俊雄

先づ綜合研究といふ建前から部別を一學科によらず、必ず二學科以上が關係を持つ四つの部門に大別した。

一、材料試験部

土木・機械關係

小爐室、爐室及選鑛室、電氣爐室、配電室、瓦斯爆發實驗室、應用地質實驗室、鑿岩及搬送實驗室、內燃機實驗室、電力實驗室、暗室、事務室。

二階 金屬材料分析室、金屬材料實驗室、氣體力學實驗室、通風實驗室、建築設備研究室、眞空實驗室、照明實驗室、土木化學研究室、寫眞乳劑實驗室、乾燥實驗室、暗室。
地下室 製水室、コンクリート養生室。

壹號館 平家建

工作室、軸受試驗室、傳動實驗室、道路材料實驗室、水力實驗室。

貳號館 平家建 (地下室付)

熔接研究室、高溫實驗室、風力實驗室、暗室。

工學部年譜

明治三十年	六月	八月	九月	二月	六月	八月
二十八日中澤岩太(化學)教授に任せらる。○教授中澤岩太理工科大學長に補せらる。勅令第二百十九號を以て土木工學第一、同第二、同第三、機械工學第一、同第二、同第三、電氣工學第一、同第二、探鑛學第一、同第二、冶金學第一、同第二、化學第一、同第二、同第三、同第四の十六講座設立せらる。	十九日山口銳之助(物理學)二見鏡三郎(土木工學)教授に任せらる。○教授二見鏡三郎土木工學第一講座擔任を命ぜらる。○大藤高彦(土木工學)松村鶴藏(機械工學)日比忠彦(土木工學)助教授に任せらる。	理工科大學開設に關する文部省令左の如し 京都帝國大學理工科大學は本年九月十一日より開設し土木工學科機械工學科を置く	十四日比企忠(探鑛學)助教授に任せらる。	文部省令第十四號を以て理工科大學中數學、物理學、純正化學、製造化學、電氣工學及探鑛冶金學の六科を置く	一日吉田彦六郎(化學)大塚要(機械工學)教授に任せらる。○教授吉田彦六郎化學	

明治三十二年

第三講座擔任、教授大塚要機械工學第二講座擔任を命ぜらる
 十三日林鶴一(數學)齋藤大吉(冶金學)青柳榮司(電氣工學)助教授に任せらる
 十八日吉川龜次郎(製造化學)助教授に任せらる
 二十三日阿部正義(冶金學)難波正(電氣工學)教授に任せらる
 三十一日教授難波正電氣工學第二講座擔任を命ぜらる
 十一日小川梅三郎(土木工學)朝永正三(機械工學)教授に任せらる ○教授小川梅三郎土木工學第三講座擔任を命ぜらる
 二十一日助教授林鶴一退職
 勅令第二百三號を以て土木工學第四、機械工學第四、電氣工學第三の三講座設立せらる
 十日田丸卓郎(物理學)助教授に任せらる
 三十一日大井清一(土木工學)助教授に任せらる
 五日金子登(機械工學)助教授に任せらる
 十一日織田顯次郎(化學)教授に任せらる
 二十七日小木虎次郎(電氣工學)教授に任せらる
 十一日教授朝永正三機械工學第三講座擔任を命ぜらる
 十一日山田邦彦(冶金學)横堀治三郎(冶金學)教授に任せらる ○教授山田邦彦冶金學第二講座擔任、教授横堀治三郎冶金學第一講座擔任を命ぜらる

明治三十三年

勅令第百八號を以て化學第五講座を設立せらる
 十四日三輪桓一郎(數學)教授に任せらる
 十八日井上秀二(土木工學)助教授に任せらる
 十一日助教授田丸卓郎退職
 一日田邊朝郎(土木工學)教授に任せらる ○教授田邊朝郎土木工學第二講座擔任を命ぜらる

明治三十四年

勅令第百三十五號を以て材料強弱學講座を設立せらる
 五日松本均(製造化學)助教授に任せらる
 三日柏木好三郎(物理學)助教授に任せらる
 九日助教授大藤高彦(土木工學)助教授青柳榮司(電氣工學第一講座)教授に任せらる
 十六日助教授松村鶴藏(機械工學第四講座)教授に任せらる
 四日渡邊俊雄(冶金學)助教授に任せらる
 十六日樋口卷一(化學)助教授に任せらる
 勅令第四百十七號を以て構造強弱學、機械工學第五の二講座設立せらる
 五日大瀧鼎四郎(電氣工學)助教授に任せらる
 三十日細木松之助(化學)教授に任せらる
 三日助教授井上秀二退職

明治三十五年

九月 四月

明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年
二月	三月	三月	四月	五月
四月男爵井上匡四郎教授に任せらる	五月	五月	五月	六月
○教授井上匡四郎探礦學第二講座擔任を命ぜらる	六月	六月	六月	七月
二十一日小野鑑正(機械工學)助教授に任せらる	七月	七月	七月	八月
二十一日平野正雄(土木工學)助教授に任せらる	八月	八月	八月	九月
三日野田清一郎(電氣工學)助教授に任せらる	九月	九月	九月	十月
二十二日今永徹次郎(冶金學)高橋昌二(冶金學)助教授に任せらる	十月	十月	十月	十一月
勅令第四百十二號を以て建築學、電氣工學第四、探礦學第三の三講座設立せらる	十一月	十一月	十一月	十二月
三日小倉公平(電氣工學)教授に任せらる	十二月	十二月	十二月	一月
○教授小倉公平電氣工學第三講座擔任を命ぜらる	一月	一月	一月	二月
三十日助教授柏木好三郎退職	二月	二月	二月	三月
二十日教授日比忠彦土木工學第三講座擔任を免ぜられ建築學講座擔任を命ぜらる	三月	三月	三月	四月
○助教授比企忠探礦學第三講座擔任を命ぜらる	四月	四月	四月	五月
五日教授山田邦彦休職	五月	五月	五月	六月
二十一日助教授堀覺太郎復職	六月	六月	六月	七月
十三日教授細木松之助退職	七月	七月	七月	八月
三十一日大築千里(製造化學)教授に任せらる	八月	八月	八月	九月
○教授大築千里化學第四講座擔任を命ぜらる	九月	九月	九月	十月
○休職助教授渡邊俊雄(探礦學第一講座)教授に任せらる	十月	十月	十月	十一月
五日助教授堀覺太郎(機械工學)教授に任せらる	十一月	十一月	十一月	十二月

明治四十四年	明治四十五年	大正二年
八月	八月	八月
九月	九月	九月
十月	十月	十月
十一月	十一月	十一月
十二月	十二月	十二月
一月	一月	一月
二月	二月	二月
三月	三月	三月
四月	四月	四月
五月	五月	五月
六月	六月	六月
七月	七月	七月
八月	八月	八月
九月	九月	九月
十月	十月	十月
十一月	十一月	十一月
十二月	十二月	十二月

大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年
六月	五月	四月	六月	十一月
八月	一月	四月	六月	一月
九月	五月	四月	六月	四月
十二月	五月	四月	六月	六月
七月	五月	四月	六月	七月

二十四日教授山田邦彦退職
 五日教授吉田彦六郎、教授横堀治三郎、教授三輪桓一郎、教授吉川龜次郎退職
 十日助教松本均(製造化學第三講座擔任)教授に任せらる
 十五日助教井出健六(採鑛學第二講座)教授に任せらる
 七日助教難波元弘退職
 十九日助教比企忠採鑛學第三講座擔任を命ぜらる
 綜合研究の建前より所屬中央實驗所設置せらる
 七日吉岡藤作(製造化學)助教に任せらる
 六日理工科大學を分離し新に工科大學及理科大學を開設せらるる工科大學には土木學科機械工學科電氣工學科採鑛冶金學科工業化學科を置く ○勅令第四百四十六號を以て土木工學第一乃至第四、構造強弱學、建築學、機械工學第一乃至第五、材料強弱學、電氣工學第一乃至第四、採鑛學第一乃至第三、冶金學第一乃至第三、工業化學第一乃至第四の二十六講座設置せらる
 六日教授大藤高彦工科大學長に補せらる ○教授大栗千里工業化學第一講座擔任を命ぜらる ○教授大栗千里退職 ○菊川清作(機械工學)島養利三郎(電氣工學)助教に任せらる ○教授井出健六採鑛學第二講座擔任を免ぜられ採鑛學第一講座擔任を命ぜらる ○教授松本均工業化學第三講座擔任を免ぜられ工業化學第四講座擔任を命ぜらる

大正四年	大正五年	大正六年	大正七年
八月	五月	六月	十一月
五月	一月	六月	一月
四月	四月	六月	四月
六月	四月	六月	六月
七月	五月	六月	七月

十五日九州帝國大學教授中澤良夫(工業化學第二講座)教授に任せらる
 二十五日助教今永徹次郎退職
 二十五日高橋逸夫(土木工學)助教に任せらる
 三十一日助教高橋昌二退職
 八日教授田邊朝郎工科大學長に補せらる
 二十六日東大助教喜多源逸(工業化學)助教に任せらる
 二十八日助教濱部源次郎(機械工學第四講座)教授に任せらる
 五日工學部規程中改正(第二條中機械工學科及電氣工學科目の一部改む)
 十二日小田川達朗(採鑛學)助教に任せらる ○助教小田川達朗採鑛學第二講座擔任を命ぜらる
 十九日宮田道雄(工業化學)助教に任せらる
 二十四日教授堀覺太郎教授小倉公平退職
 十一日教授朝永正三工科大學長に補せらる
 勅令第二百六十一號を以て工業化學第五講座設立せらる
 三日助教野田清一郎休職
 七日助教福島郁三(工業化學第三講座)教授に任せらる
 十七日山田實一(冶金學)大森實一(工業化學)助教に任せらる
 十日助教喜多源逸工業化學第五講座擔任を命ぜらる

大正十一年

五月
六月
七月
九月
十月
十一月
十二月

- 三十日荒木源次(建築學)藤井厚二(建築學)助教授に任ぜらる
- 二日教授日比忠彦逝去
- 八日田村豊(機械工學)助教授に任ぜらる
- 十二日助教授平野正雄土木工學第五講座擔任を命ぜらる
- 二十二日助教授宮田道雄工業化學第六講座擔任を免ぜらる
- 十九日井上昇(電氣工學)助教授に任ぜらる
- 十二日助教授田村豊休職
- 七日助教授菊川清作(機械工學第六講座)教授に任ぜらる
- 十七日工學部陸軍砲工學生及海軍學生規程制定
- 四日菅原首雄助教授に任ぜらる
- 十日工學部規程改正(第十條中改正第十八條削除)
- 十七日教授金子登工學部長に補せらる
- 二十六日坂靜雄助教授に任ぜらる
- 勅令第三百號を以て土木工學第六、機械工學第七、電氣工學第六、採礦學第四、化學機械學の五講座を設立せらる
- 十七日助教授平野正雄(土木工學第五講座)教授に任ぜらる
- 十六日和邇完爾助教授に任ぜらる
- 十六日工學部陸軍砲工學生及海軍學生規程改正(第二第三條を削除す)

大正十二年

十二月
一月
三月
四月
五月
六月
七月
八月
十月
十一月
二月

- 十九日助教授田村豊復職
- 二十二日森田慶一助教授に任ぜらる
- 八日工學部規程改正(第四條中機械工學科目を改む)
- 十一日助教授島養利三郎(電氣工學第三講座)教授に任ぜらる
- 十日藤田義象助教授に任ぜらる
- 二十一日龜井三郎助教授に任ぜらる
- 二十五日教授二見鏡三郎退職
- 十四日助教授天沼俊一(建築學第三講座)教授に任ぜらる
- 三十日助教授山田賀一(冶金學第三講座)教授に任ぜらる
- 二十五日西村秀雄(冶金學)助教授に任ぜらる
- 二十日二見鏡三郎名譽教授の名稱を授けらる
- 十二日助教授荒木源次逝去
- 五日教授田邊朝郎教授小川梅三郎退職
- 二十七日田邊朝郎小川梅三郎に名譽教授の名稱を授けらる
- 十二日助教授宮田道雄(工業化學第六講座)教授に任ぜらる
- 二十三日工學部規程改正
- 十九日瀧山與(土木工學)大竹太郎(電氣工學)教授に任ぜらる ○松田長三郎(電氣工學)助教授に任ぜらる ○教授瀧山與土木工學第二講座、教授大竹太郎電氣

昭和四年		昭和五年	
二月	六日助教加藤信義(電気工學第六講座)教授に任ぜらる	二月	十六日大塚要名譽教授の名稱を授けらる
三月	七日林重憲(電気工學)助教に任ぜらる	三月	七日工學部規程改正(第三條中土木工學科、機械工學科、電気工學科、工業化學科科目一部に改む)
四月	一日教授天竹太郎工業大學教授に轉任	四月	八日教授松本均工學部長に補せらる
	十二日助教井上昇逝去		十一日阿部清(電気工學)助教に補せらる
	二十日西原清廣(冶金學)助教に任ぜらる		十八日長尾不二夫(機械工學)助教に補せらる
	三十日江藤禮(土木工學)助教に任ぜらる		○助教植植賜太郎退職
	○教授岡本尅(電気工學第五講座)擔任を免ぜられ電気工學第二講座擔任を命ぜらる		一日助教西村秀雄(冶金學第四講座)教授に任ぜらる
	十五日助教龜井三郎化學機械學講座擔任を命ぜらる		十日助教龜井三郎(化學機械學講座)教授に任ぜらる
	二十二日教授大塚要退職		六日教授金子登退職

昭和六年		昭和七年	
二月	十二日助教江藤禮神戸高等工業學校教授に轉任	一月	十一日松村鶴藏名譽教授の名稱を授けらる
三月	五日金子登名譽教授の名稱を授けらる	三月	二十四日安藤弘平(電気工學)助教に任ぜらる
四月	十日名譽教授二見鏡三郎逝去	三月	二十五日工學部電気工學教室作工室建物焼失
五月	十二日工學部規程改正(第三條中機械工學科科目一部改む)		三十一日教授西原利夫機械工學第二講座擔任を免ぜられ材料強弱學講座擔任を命ぜらる
六月	三十日石原藤次郎(土木工學)助教に任ぜらる		
七月	三十日助教菅原實雄(機械工學第一講座)教授に任ぜらる		
八月	八日助教倉内吟二郎(探礦學第三講座)教授に任ぜらる		
九月	二十二日工學部規程改正(第三條中建築學科特別科目改正)		
十月	十日助教澤井八洲男構造強弱學講座擔任を命ぜらる		
	八日教授三浦耀逝去		
	二十日教授松村鶴藏退職		
	十一日松村鶴藏名譽教授の名稱を授けらる		
	二十四日安藤弘平(電気工學)助教に任ぜらる		
	二十五日工學部電気工學教室作工室建物焼失		
	三十一日教授西原利夫機械工學第二講座擔任を免ぜられ材料強弱學講座擔任を命ぜらる		
	八日教授本野亨工學部長に補せらる		
	七日工學部委託研究規程及同細則制定		

昭和八年	昭和九年
十二月	二月
一月	十二月
三月	五月
四月	三月
三月	四月

三日教授武田五一退職
 七日教授齋藤大吉退職
 十二日齋藤大吉名譽教授の名稱を授けらる
 三十日工學部規程改正(第三條中機械工學科、採鑛冶金學科及工業化學科科目を改む)
 三十一日助教澤村宏(冶學第一講座)教授に任せらる
 一日教授青柳榮司退職
 四日助教坂靜雄(建築學第一講座擔任)教授に任せらる
 八日教授松本均退職
 五日青柳榮司、松本均名譽教授の名稱を授けらる
 十一日助教澤井八洲男(構造強弱學講座)助教田伏敬三(機械工學第三講座)教授に任せらる
 十六日教授福島郁三退職
 二十七日岡田辰三(工業化學)棚橋諒(建築學)助教に任せらる
 十三日工學部中央實驗所建物燒失
 二十七日工學部規程改正(第三條中土木工學科機械工學科電氣工學科工業化學科科目を改む)
 十九日助教紀野久次郎退職

昭和十年	昭和十一年
五月	五月
四月	三月
三月	二月
一月	一月
三月	九月
四月	七月
五月	六月
六月	五月
七月	四月
八月	三月
九月	二月
十月	一月
十一月	十二月

二十二日助教松田長三郎(電氣工學第五講座)教授に任せらる
 三日大阪帝國大學助教佐々木外喜雄(機械工學)助教に任せらる
 二十八日助教和邇莞爾逝去
 三十一日櫻田一郎(工業化學)助教に任せらる
 九日教授中澤良夫工學部長に補せらる
 二十五日助教森田慶一(建築學第二講座擔任)教授に任せらる
 十一日横山尊雄(建築學)助教に任せらる
 八日工學部規程改正(第三條中機械工學科電氣工學科科目改正)
 三十日米谷榮二(土木工學)久恒中陽(採鑛冶金學)助教に任せらる
 三十一日助教櫻田一郎(工業化學第四講座)教授に任せらる
 十二日助教藤田義象(採鑛學第一講座)教授に任せらる
 八日教授吉岡藤作退職
 十日金澤一雄(採鑛冶金學)助教に任せらる
 三十一日助教澤井郁太郎工業化學第一講座擔任を命ぜらる
 九日教授濱部源次郎工學部長に補せらる
 十五日馬詰哲郎(工業化學)助教に任せらる
 三十一日木村和三郎(工業化學)助教に任せらる ○助教津枝正介退職
 六日助教澤井郁太郎(工業化學第一講座)教授に任せらる

昭和十二年

七月 三十日助教馬詰哲郎退職
 九月 十四日助教天沼俊一退職
 一月 二十三日小西一郎(土木工學)助教に任せらる
 二月 二十日工學部規程改正(第三條中工業化學科建築科科目を改む)
 三月 三十一日河本實(機械工學)助教に任せらる
 六月 三十日教授渡邊俊雄退職
 七月 十五日小田良平(工業化學)助教に任せらる
 八月 二十九日助教仲井俊雄退職
 九月 十二日渡邊俊雄名譽教授の名稱を授けらる
 十月 三十一日助教羽村二喜男(電氣工學第一講座)教授に任せらる ○村田治郎(建築學)教授に任せらる ○教授村田治郎建築探學第三講座擔任を命ぜらる ○教授瀧山與退職
 十一月 九日教授平野正雄工學部長に補せらる
 十二月 三十日教授大井清一退職
 七月 七日大井清一名譽教授の名稱を授けらる
 十一月 二十五日工學部規程改正(通則改正に伴ひ本規程全般に互り改む)
 十一月 三十一日奥島啓式(機械工學)助教に任せらる
 十二月 九日助教藤本武助機械工學第七講座擔任を命ぜらる

昭和十三年

五月 三十一日工學部長平野正雄教授中澤良夫教授喜多源逸燃料化學科創設委員を命ぜらる
 六月 二十九日堀尾正雄(工業化學)助教に任せらる
 七月 十七日教授藤井厚二逝去
 十一月 三十日清野武(電氣工學)助教に任せらる
 十二月 十九日教授濱部源次郎逝去
 八月 八日助教藤本武助(機械工學第七講座擔任)教授に任せらる
 十一月 勅令第百八號を以て燃料化學第一、同第二の二講座設立せらる
 十一月 三十一日工學部規程改正(第一條中燃料化學科を加へ第三條中土木工學科採鑛冶金學科工業化學科科目を改め燃料化學科科目を加ふに改む) ○助教佐々木外喜雄機械工學第五講座擔任を命ぜらる ○助教小田良平工業化學第三講座擔任を命ぜらる
 一月 一日工學部に燃料化學科を置く ○教授喜多源逸工業化學第五講座擔任を免ぜられ燃料化學第一講座擔任を命ぜらる
 二月 二十四日教授本野亨退職
 七月 九日教授喜多源逸工學部長に補せらる
 七月 十七日名譽教授渡邊俊雄逝去
 九月 三十日大谷泰之(電氣工學)助教に任せらる

昭和十四年

五月 三十一日工學部長平野正雄教授中澤良夫教授喜多源逸燃料化學科創設委員を命ぜらる
 六月 二十九日堀尾正雄(工業化學)助教に任せらる
 七月 十七日教授藤井厚二逝去
 十一月 三十日清野武(電氣工學)助教に任せらる
 十二月 十九日教授濱部源次郎逝去
 八月 八日助教藤本武助(機械工學第七講座擔任)教授に任せらる
 十一月 勅令第百八號を以て燃料化學第一、同第二の二講座設立せらる
 十一月 三十一日工學部規程改正(第一條中燃料化學科を加へ第三條中土木工學科採鑛冶金學科工業化學科科目を改め燃料化學科科目を加ふに改む) ○助教佐々木外喜雄機械工學第五講座擔任を命ぜらる ○助教小田良平工業化學第三講座擔任を命ぜらる
 一月 一日工學部に燃料化學科を置く ○教授喜多源逸工業化學第五講座擔任を免ぜられ燃料化學第一講座擔任を命ぜらる
 二月 二十四日教授本野亨退職
 七月 九日教授喜多源逸工學部長に補せらる
 七月 十七日名譽教授渡邊俊雄逝去
 九月 三十日大谷泰之(電氣工學)助教に任せらる

昭和十五年

十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
<p>十四日本野亨名譽教授の名稱を授けらる</p> <p>十八日助教授小林勇(土木工學第二講座)教授に任せらる</p> <p>八日喜多工學部長、中澤教授、龜井教授化學機械學科創設準備委員を命ぜらる</p> <p>十五日助教授佐々木外喜雄(機械工學第五講座)教授に任せらる</p> <p>三十日助教授阿部清(電氣工學第四講座)教授に任せらる ○兒玉信次郎(燃料化學)教授に任せらる ○教授兒玉信次郎燃料化學第二講座擔任を命ぜらる ○穴戸圭一(工業化學)助教授に任せらる</p> <p>三十一日教授喜多源逸燃料化學第一講座擔任を免ぜらる ○新宮春男(燃料化學)助教授に任せらる</p> <p>一日工學部に化學機械學科を置く ○工學部規程改正第一條中化學機械學科を加へ第五條中電氣工學科、採鑛冶金學科目を改め化學機械學科目を加ふに改む</p> <p>○助教授久恒中陽名古屋帝國大學教授に轉任</p> <p>八日森田志郎(採鑛冶金學)助教授に任せらる</p> <p>五日舟阪渡(燃料化學)助教授に任せらる</p> <p>二十五日岡村誠三(工業化學)助教授に任せらる</p> <p>二十六日勅令第四百二十二號を以て燃料化學第三、化學機械學第一、同第二の三講座設立せらる ○從來の化學機械學講座は本勅令に依り化學機械學第一講座となる○教授堀井三郎化學機械學講座擔任を免ぜられ化學機械學第一講座擔任を命</p>								

七月	十月	十二月
<p>せらる○助教授岡田辰三(化學機械學第二講座)教授に任せらる ○教授澤井郁太郎工業化學第一講座擔任を免ぜられ燃料化學第三講座擔任並工業化學第一講座兼擔を命ぜらる</p> <p>三十一日助教授小田良平(工業化學第三講座)教授に任せらる</p> <p>四日教授平野正雄退職</p> <p>九日平野正雄名譽教授の名稱を授けらる</p> <p>十五日速水惠次(化學機械學)助教授に任せらる</p> <p>物理探鑛學講座設立せらる</p> <p>三日工學部規程改正(第二條第一項を改む)</p> <p>十一日教授藤田義象採鑛學第一講座擔任を免ぜられ物理探鑛學講座擔任並採鑛學第一講座兼擔を命ぜらる</p>		